

12 司馬凌海

—その名古屋時代（明治九〜十二年）

高橋 昭

司馬凌海の佐渡、長崎から東京の時代については、これまで医学史的な資料に基づいた若干の報告がある。演者は、第一〇一回日本医史学会総会（京都、平成十二年）

において、凌海の生涯全般についての概略と遺跡の現状について講演した。しかし、凌海の名古屋時代（明治九年から十二年）については、第二次世界大戦時に名古屋市の中心地がほぼ壊滅的な戦禍を受けたため現存する資料が乏しく、これまで詳しい検討はほとんどなされていない。今回、主として名古屋大学に保管されている資料を中心として、凌海の名古屋時代の足跡を辿った。その一部を報告する。

一、愛知県への雇入れ

明治九年五月十六日付の愛知県布達第三百三号によれ

ば、県公立病院に雇用していた教師米人ヨングハンスが満期となったため、ホン・ローレッツを教師として、凌海を副教師、通弁、兼医学校教師として雇入れた（愛知県布達類聚、明治九・十年）。

凌海は、明治七年九月に東京医学校長を罷免された相良知安に関連して、その後同校を辞職した。ローレッツとともに凌海が愛知県へ雇入れられることになった背景の資料はないが、凌海と親交のあった松本良順の推薦があった可能性がある。

二、医学講習場における講義内容

愛知県公立病院及医学校第一報告に、ローレッツと凌海の担当した教授項目の記載がある。これによれば、ローレッツは外科通論を担当し、凌海は診断学、薬物学、ラテン語、処方学などの講義を担当し、さらにドイツ語も教授した。

また、愛知県布達一一二号（明治九年五月）には、それまで英学をもって教授してきたところを廃し、今後は独逸学をもって教授するとある。東京医学校は明治二年以来のドイツ医学導入政策に添って教育が整備されていた

が、それ以外の日本の医学校はほとんどが英米蘭系の医学教育をしていたので、恐らく東京医学校に次いでドイツ語によるドイツ系の医学教育が採用されたものと考えられる。

ローレッツと凌海は協力しながら、教則の改革に努力し、洋式の近代的な病院および医学校の建築に腐心したのもこの頃である。翌明治十年七月に天王崎に新病院の落成をみているが、その直前の四月に凌海は満期で解雇になっている。

三、日本人による最初の病理解剖

明治九年七月に、凌海は愛知県の東北部の山村である設楽郡上津具村（現在の北設楽郡津具村釜石）に住む診断不明の患者の往診依頼を受けた。凌海が弟子数名を連れて籠に乗り名古屋から二泊三日かかって到着した折りに、患者は死亡した直後であった。凌海は患者の病歴を子細に検討し、子宮外妊娠の可能性を家族に説明し、病理解剖を申し入れた。家族の了解のもとに病理解剖が行われ、剖検の結果これが確認された（愛知県公立病院及医学校第一報告）。恐らく、日本人による最初の病理解剖で

あったものと思われる。

凌海らによる往診は愛知県からの指示による公的なものであり、剖検された患者の墓石は愛知県により建立された。この石碑は現存しており、愛知県建立、明治九年七月三日、および奇癥妙果禪定尼の戒名が刻まれている。

四、後藤新平との関係

凌海の愛知県への雇用にやや遅れ、明治九年八月二五日に後藤新平が愛知県病院三等医として採用された。十月から後藤は凌海の家塾に入り、独逸学を教わった。この頃、凌海は『リヨンの衛生観察および裁判医学』、『仏蘭西の馬の解剖学』の翻訳口述を行い、後藤がこれを筆記した。

五、凌海は明治十年に公立医学校を辞した後、名古屋で開業を目指していた。この頃、肺結核を発病、明治十二年に名古屋を去り、上京の途次に神奈川県戸塚で歿した。

（名古屋大学名誉教授）